

令和2年度 学力向上指導改善プラン

三田市立狭間中学校長 大杉 正昭

学校教育目標		人間尊重を基盤とし、確かな学力と豊かな心でたくましく生きる生徒の育成
推進主体		管理職・主幹教諭(研究推進担当)・各教科代表で研究推進委員会を設置し、学力向上に向けた取り組みを推進する
学力に関する前年度の状況・経年の課題等		
学力の状況	全国学力・学習状況調査結果の状況(国語、算数・数学に関する質問紙調査の結果も含む)	国語 ○全国学力・学習状況調査において、書くことの領域で全国平均正答率を5%以上、上回った。 ○記述式問題において無解答があり、書ける・書けないの差が大きくなっていると考えられる。作文等に取り組み、苦手な生徒に対する重点的な指導を行う必要がある。その中で、相互評価・振り返りと教師からの助言によって、苦手意識を取り除いていく活動を、時数の制限の中でいかに継続して行うかが課題である。
		算数・数学 ○全国学力・学習状況調査において、「関数」と「図形」の領域で正答率は全国平均を5%以上、上回った。「資料の活用」領域は目標とした5%と同程度であったが、若干満たなかった。また、活用力を問う設問では全国平均を上回るが、正答率が他の設問より低く、学習内容を活用する力に課題がみられた。 ○授業の中で日常生活の具体的な事象を取り上げ、その解決をはかるといった場面を設定し、生徒自らが前向きにその課題に向き合い活用力を養う。 ○「資料の活用」領域は問題演習の量を増やして基礎基本を定着させ、数学的な用語を使って事象を考察する力をつける。
	定期テスト、単元テストなどによる状況(各教科)	・テストへの意識が高く、定期考査前には、家庭学習の時間を確保して勉強に取り組んでいる。 ・今後は、効率的な家庭学習を行うために、学習計画を立てて実行させるとともに、補習を学校全体の取組として充実させることで、低学力の生徒への支援を行う必要がある。
	授業等からうかがえる状況(各教科)	・安全で安心した学校生活が保障され、生徒の規範意識は高く、授業も集中して取り組んでいる。 ・生徒は規律や約束を守り、宿題や提出物も守られている。 ・今後は、「見通しと振り返り」や「主体的・対話的で深い学び」等の授業形態をより浸透させる必要がある。
学力生向上に係るの学習習慣・状況	全国学力・学習状況調査の質問紙の状況	・生徒は規律正しい生活を送り、課外活動にも意欲的に取り組んでいる。また、教師との関係も良好で、人の役に立ちたいという意識も持っている。 ・今後は、「自己有用感を感じる機会と場の設定」や「話し合いによる学び合うスキル」の向上に努める必要がある。
	学校評価などのアンケート調査による児童・生徒の状況	・生徒は楽しく充実した学校生活を送っている。 ・生徒の個性を尊重したり、生徒一人ひとりに活躍の機会や場を提供し切れていない。 ・今後は、一層のわかりやすい授業と基礎学力の定着に努める必要がある。
校修内の研究状況・研	校内研究の状況	・「主体的・対話的で深い学び」を実現させるために、協働学習を取り入れた授業づくりを行うこととし、校内研究推進体制を整備している。
	校内研修の状況	・特別に支援の必要な生徒や精神面で不安を抱える生徒に対する支援方法を研修している。
家庭・校種間連携	家庭・地域等の状況	・学校生活に適應できない生徒や対人関係に課題のある生徒の家庭と連絡を密にし、保護者と連携して指導にあたっている。 ・今後は、地域の教育力を活用した取組を進める必要がある。 ・SNS等に係る諸問題を家庭と連携して解決に当たる必要がある。
	小・中における教科連携等の状況	・小中が連携して、個々の生徒への実態把握に努め、具体的な対応や生徒指導を行っている。また、児童会と生徒会の交流も「あいさつ運動」等を通して活発化している。 ・今後は、中学校で必要な基礎学力の定着を、小中連携して取り組む必要がある。

		4月		2～3月		
学力向上に向けての重点的な目標		成果となる目標 (指標となる数値等)	具体的な行動目標 (成果目標達成のための具体的な手立て等)	年度末評価 (今年度の成果と来年度に向けた課題等)		評価
		○言葉や漢字に関する興味・関心を高め、語彙を増やすことで言語活動の充実を図る。 ○小説や詩などの文学作品の主題を理解するために、対話的な活動を取り入れる。 ○論理的な文章の構成を理解させ、具体例を示した論説文を書く力を育成する。 ○ICT機器を活用したプレゼンテーション能力を高める。	○学校評価アンケートで、生徒の学習状況を把握し、「授業が分かりやすい」の数値を90%以上にする。 ○古典と現代文を比較し、言葉の移り変わりを学ぶことで言葉に対する興味・関心を高める。 ○知識構成型ジグソー法などを活用し、グループ毎に主題へのアプローチを変え、主体的・対話的な活動につなげる。 ○プレゼンテーション活動やディベート等を行い、言語表現力を高める。	○学校評価アンケートの質問3「先生は、教え方を工夫して分かりやすい授業を行っている」で、生徒アンケートでは「そう思う」、「ややそう思う」が 95.6%であった。これは、4月に掲げた数値目標を達成し、良好な結果であった。 ○ICT機器を活用したプレゼンテーションを行うことができた。ただ、コロナ感染拡大のため、話し合い活動を十分おこなうことができなかった。 ○各単元毎の目標をしっかりと示し、課題を考えさせることで、主体的に学ぶ力が少しずつできた。		B
		○具体物・半具体物をもとに、体感的に物事をとらえる学習場面を設定する。 ○数学的用語を活用し、既習事項の定義や公式をもとに根拠を図示して、筋道立てて考えを説明する活動を充実する。 ○ねらいを明確に示し、振り返りを行う。 ○「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた授業改善に取り組む。	○学校評価アンケートで、生徒の学習状況を把握し、「授業が分かりやすい」の数値を90%以上にする。 ○問題場面を図示したり、条件を書き出したりして、根拠を明確にし、筋道を立てて考える活動の充実を図る。 ○グループ学習を通じ、物事を数学的に捉え、筋道を立てて考えを表現する力の充実を図り、深い学びができる授業を実践する。 ○予想を立ててから測定したり、図示したりするなど、感覚的に捉えた事柄を具体的に示す活動を充実する。 ○毎週木曜日の放課後の学習相談を充実させ学力補充を行う。 ○単元を通して、深い学びにつながるようなグループ学習を行う。	○学校評価アンケートの質問3「先生は、教え方を工夫して分かりやすい授業を行っている」で、生徒アンケートでは「そう思う」、「ややそう思う」が95.6%であった。これは、4月に掲げた数値目標を達成し、良好な結果であった。 ○木曜日の放課後に補充学習を行い基礎基本の定着を図った。生徒が主体的に参加し、学習に取り組む様子がみられた。 ○今年度は、感染症拡大防止の点から、グループワークやペアワークができなかったが、数学的表現を用いて説明する活動を多く取り入れ、深い学びにつながるよう工夫した。		A
		○学習相談の充実させる。 ○5教科で毎日10分間の朝学習に取り組む、基礎基本の徹底を図る。	○学校評価アンケートで「授業がわかりやすい」の数値を90%以上にする。 ○定期考査前に学習計画を立てさせ、効率のよい学習方法を身に付けさせる。 ○木曜日の学習相談を充実させ、基礎学力の向上に取り組む。	○学校評価の「基礎学力の定着に向けた取り組み」については、96%の生徒が肯定的な回答をしている。一方、保護者の20%は否定的な回答をしているので、基礎学力の定着をさらに図る必要がある。 ○本年度の学習相談は学力補充の観点から2年3年を対象にした。数学と英語を隔週で行い、基礎基本の徹底を図った。1年も英語と数学の補充学習を学年で取り組んでいる。今後も学力保障の観点から、木曜日の学習相談を継続していく。		A
		○わかる授業・楽しい授業の改善に努める。 ○発表や話し合いを大切にしたい授業で、自尊感情を高める。 ○来年度からの新指導要領完全実施を踏まえて、評価の仕方についての研究を進める。	○校内研修を充実させ、授業力の向上に向けた研究に取り組む。 ○授業の「見通しと振り返り」や「主体的・対話的で深い学び」等の授業形態を取り入れるなど、授業の改善に努める。	○学校評価「授業がわかりやすい」の項目では、生徒の96%は肯定的な評価をしている。一方保護者は82%が肯定的な評価なので、生徒と保護者では捉え方の違いがみられる。また、「教科によってわかりやすさに違いがある」という意見もあるので、どの教科でも「めあて」や「ねらい」を明確にして、見通しをもって授業に取り組めるようにする必要がある。 ○コロナの関係で、「主体的対話的な学び」の基本となる協働学習は難しかった。今後はタブレットを使って「主体的・対話的な学び」ができるような学習方法の工夫や研究が必要がある。		B
		○自己有用感を高める。 ○全教育活動などを通じて、話し合い活動を活発にし、学び合う力を向上させる。	○新しい教科道徳への重点的な取組や学習相談、毎月実施する生活アンケート等により生徒の実態把握を行うとともに、自尊感情の高揚を図っていく。 ○授業のみならず、全教育活動を通して「主体的・対話的で深い学び」の実現の実現に向けての取り組みを推進する。	○学校評価「いじめや暴力がなく、安心して学校生活が送れている」については、生徒の5%、保護者の11%が否定的な回答をしている。日々の生徒とのかわりを通して、いじめの早期発見早期対応に努めていかなくてはならない。また、未然防止の取り組みや研修も充実させていく必要がある。 ○学校評価の「基礎学力の定着に向けた取り組み」については、96%の生徒が肯定的な回答をしている。一方、保護者の20%は否定的な回答をしているので、基礎学力の定着をさらに図る必要がある。 ○本年度の学習相談は学力補充の観点から2年3年を対象にした。数学と英語を隔週で行い、基礎基本の徹底を図った。1年も英語と数学の補充学習を学年で取り組んでいる。今後も学力保障の観点から、木曜日の学習相談を継続していく。		A
		○いじめや暴力がなく、落ち着いた学校生活を保障する。 ○生徒の個性を大切にしたい教育機会の提供に一層努める。 ○基礎学力の定着を一層図る。	○学習タイムを実施し、基礎学力の定着につなげる。 ○教育相談アンケートによる詳細な分析から個々の生徒の特性を的確に把握し、生徒理解に努め個性の尊重を図る。	○学校評価アンケートの「教師は、生徒のことを良く理解し、適時・適切に指導している」「生徒の個性を大切にしたい」という意見は増加したが、保護者の肯定的割合が75%程度であることは依然として課題である。生徒理解を一層進めていくことが重要である。 ○教育相談や各種調査をもとに、一層の生徒理解に努める。		A
		○主体的・対話的で深い学び実現に向けた授業改善に努める。	○協働学習の手法を取り入れ、学習者同士が対話的に学び合うことで学習内容の定着を図り、相手の意見をよく聴くとともに、自分の意見を伝える技術を高めることができる授業を実現していく。	○授業時間の確保を優先したため、全体での授業参観および授業研究は十分できていない。 ○評価の在り方についての研修やICT研修は喫緊の課題である。		B
		○発達障害等への理解を深め、生徒理解につなげる。	○発達障害など特別に支援の必要な生徒向けの学習支援の在り方等の研修を行う。	○通級生徒については、指導員との連携を図り、学習の進み具合や現在の課題を共有し、指導に生かした。 ○ハイパーQUを実施した後に講師を招いての研修会を行って、生徒理解や対応に生かすことができた。その手法を活用して今後も生徒理解に努めていく。		A
		○地域の関係機関との連携を深め、地域と連携したきめ細やかな支援体制を確立する。 ○生徒、保護者への情報モラルに係る講習や啓発を年間指導計画に基づき実施する。	○不登校生徒や相談室生徒の割合を昨年度より低くする。 ○SNS等に係る生徒指導事案の割合を昨年度より低くする。 ○生徒、保護者への情報モラルに係る講習や啓発を年間指導計画に基づき実施する。	○SCやSSWや関係機関と連携し、学校生活に適應できない生徒や課題のある生徒へのケアに努める。 ○ハイパーQUを実施した後に講師を招いての研修会を行って、生徒理解や対応に生かすことができた。その手法を活用して今後も生徒理解に努めていく。		A
		○6年生を中心に児童の学力と生活状況を把握する。	○学期に1回の連絡会と、小学6年生への出前授業を実施する。	○今年度はコロナの関係でオープンスクールはできなかった。来年度、新1年生がスムーズに学校生活が送れるよう、小学校との連携を密にして情報の共有や学力保障ができるようにする必要がある。 ○コロナ禍ではあったが、生徒会が中心となり中学校生活に係る出前授業を実施した。		B